

保育内容「環境」の研究動向に関する一考察

—CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて—

A Study on Research Trend of Childcare Contents “Environment”: Using Text Mining on Titles of Published Papers

畑野裕子*・大竹留美**

要旨

保育内容の「環境」に関する研究は、数多くなされているが、保育者養成課程における保育内容・環境に関する研究テーマ動向についての詳細な検討、客観的な分析に観点を絞った研究は、数少ない。そこで、本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター（CiNii）から、「保育内容 環境」をキーワードとしてフリーワードを入力し、それらに関する文献を検索した。そして、論文タイトルをテキストマイニングにより分析し、その結果から研究動向を検討した。

キーワード：保育者養成課程 CiNii テキストマイニング 保育内容 環境 幼児教育

1. 緒言

近年、幼稚園教育要領（文部科学省，2017）、保育所保育指針（厚生労働省，2017）や幼保連携型認定こども園教育・保育要領（内閣府，2017）の改訂を背景として、保育者養成課程におけるカリキュラムに関して、再検討がなされている。特に、保育力の基礎を培うことを目的としたカリキュラムとしては、「保育内容」の授業が1年の学習から設定されている。保育内容は、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」と5つの領域に分けられ、保育内容は、「ねらい」を達成するために、子どもの生活やその状況に応じて保育士等が適切に行う事項と、保育士等が援助して子どもが環境に関わって経験する事項を示したものである。保育者養成課程に在籍する学生にとって、保育所で実施する保育におけるねらいや内容が重要であることはいうまでもない。したがって、保育者養成課程においては、保育を有益に進めていけるように、保育内容の授業がなされている。

そこで、保育内容「環境」に関する研究を概観してみると、保育内容の「環境」を視点として、保育者の語りを分析した佐藤（2019a）、の研究は、保育内容の理解に関して、一定条件のもとにいる保育者を面接により分析している。佐藤（2019b）、は、幼児に対しても、イン

* 神戸親和女子大学 発達教育学部 児童教育学科 教授

** 神戸親和女子大学大学院 修士生

タビュー形式で領域「環境」について、四季の感覚を研究している。また同じく佐藤(2018)は、栽培活動を行った後に、植物に関してどのように何によって生物学的理解をしているのかについてまとめている。

日本における地域の研究を行っている山路(2018)は、保育内容「環境」における地域と保育・教育、子育てのかかわりについて述べている。地域として取り上げられたのは、栃木県、北海道上川郡剣淵町である。「地域で子どもを育てる」という地域力を生かした地域での子育てについて述べている。

一方、伊藤(2019)らは、北欧の国、フィンランドにおける運動遊びについて「環境」を視점에述べ、研究対象園で運動遊びの展開を行い、養成課程の学生らと幼稚園教諭によるアンケートを取り、集計している。フィンランドといえば、雪と氷の環境をイメージするが、その中で、幼児に運動遊びを展開している内容が環境を整えながら実施なされているものであり、日本において応用したものである。例えば、北海道・東北では、冬の間の外遊びは気候の条件的に厳しいが、フィンランドの室内運動遊びを日本向けに応用し、保育・教育する環境設定であると考えられる。

したがって以上のように、本研究では、保育内容「環境」について俯瞰的にみていく。

2. 方法

2.1 対象文献の抽出

国立情報学研究所(NII)のCiNii(NII学術情報ナビゲータ[サイニィ])を使用し、1944年~2019年までに発行され、CiNiiに掲載された文献について、「保育内容 環境」のキーワードをもとに、フリーワードに入力して、調査対象文献を253件、抽出した。その中で有効な調査対象文献については247件となった。また、これらのデータベースからは、論文タイトルとともに、執筆者氏名、出典、執筆年、論文のページ数が検索可能であるため、それらについても収集した。なお、2019年10月20日現在、「保育内容」のキーワードでフリーワードに入力して、検索した結果、1,795件であった。「保育内容環境」のキーワードでは、129件であった。つまりキーワード検索により研究対象論文の数に差異が生まれるので、研究対象を見極める基準を慎重に決定付ける必要がある。

抽出文献をもとに、次にあげる文献の出典に関して、調査対象文献を整理して絞り込みを行った。なお学会出版物においては、一般的な学会発表要旨を含んでいるものの、CiNiiのキーワード検索により抽出された文献に含まれていることから、分析対象とした。

- ① 学会出版物：日本学術会議において学術研究団体として登録されている学会が発行する学会出版物に所収されている文献
- ② 大学紀要：大学が発行する研究紀要及び報告書に掲載されている文献
- ③ その他：日本幼稚園協会、全国保育士養成協議会、出版社が発行する研究雑誌などに掲載

されている文献、未登録論文

また、1960年～2019年（10月1日）までに発行され掲載された文献について、経年の変化を概括するために幼稚園教育要領の改訂時期の区切り（1956年、1964年、1989年、1998年、2008年、2017年）を参考に、先行実施・改訂間の年数を考慮したうえで、本報では便宜上次のように4つに区分（1960年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年）し、整理することとした。

2.2 分析の手続き

前述した方法で抽出した論文タイトルには、学会発表における番号や記号その他にも直接論文タイトルとは関連性のない名称（文献における特集記事やシンポジウムなどの情報）を含んでいるものが多数あった。それらの今回の分析に関係がないと思われる情報については、各論文タイトルをチェックして、不必要な情報に関して削除したうえで論文タイトルを整理し次資料とした。なお、分析は上記に抽出した論文タイトルに対するテキストマイニングをKH Coder2.00f（樋口, 2001, 2014, 2015）を用いて実施した。同時に、年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみた研究動向の推移について検討した。この手法を用いた研究としては、例えば、「保育内容」に関する研究動向を分析した畑野（2019）の報告がある。これを参考に本報では、以下の手続きで分析を進めた。

(1) 「保育内容 環境」に関する研究の構造の把握

抽出した文献のタイトルについて形態素解析を行い、論文タイトルに含まれている名詞句、サ変名詞句の出現頻度を把握した。そして、出現頻度上位語句の共起ネットワークを作成し、そのまとまりから研究の構造を解釈した。

(2) 論文種別による研究動向の差異の検討

出現頻度上位語句の共起ネットワークに、論文種別を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、論文種別による研究動向の差異について検討した。

(3) 年代別にみた研究動向の推移

年代を外部変数とする共起関係を設定し、得られた共起ネットワークから、年代別にみられた研究動向の推移について検討した。

3. 結果と考察

3.1 「保育内容 環境」に関する論文のCiNii掲載状況

2019年4月26日現在、抽出文献は253件であった。なお、これら253件の抽出文献のなかでCiNiiに掲載されているタイトル名として、論文名以外の語句を有する文献が多くみられた。そこで、方法に記したようにそれらの文献については、論文名を確認し、最終的には247件の抽出文献に対して二次資料を作成した。表1は、それら抽出文献について、文献の出典別に出

現度数及びパーセンテージを示したものである。文献の出典をみると、大学が発行する研究紀要が201件で、全体の81.4%と最も多く、続いて学会発行の出版物が40件で16.2%、その他の出典が6件、2.4%である。

また発表年でみると、表2に示したように、2017年～2019年が105件で全体の42.51%を占めており、最も多く、続いて2008年～2016年の87件で35.2%、1998年～2007年の39件で15.8%、1960年～1997年に16件で6.5%となっている。1988年～2007年から2008年～2016年には、2.2倍近く件数が増加しており、また2017年～2019年では、約2年間で、全体の4割強が出現していることが読み取れる。

表1 「保育内容 環境」に関する論文の出典別度数

論文種別	度数	%
学会	40	16.2
紀要	201	81.4
その他	6	2.4
総計	247	—

表2 「保育内容 環境」に関する論文の年代別度数及びパーセンテージ

年代	度数	%
1960年～1997年	16	6.5
1998年～2007年	39	15.8
2008年～2016年	87	35.2
2017年～2019年	105	42.5
総計	247	—

表3は、文献の出典と発表年をクロス集計した結果を示したものである。大学が発行する研究紀要をみると、2017年～2019年が98件、2008年～2016年には70件、1998年～2007年が27件、1960年～1997年の年代には6件であった。学会が発行する出版物については、2008年～2016年が16件、1998年～2007年が11件、1960年～1997年が9件、2017年～2019年が4件となっている。その他の出版物については、2017年～2019年が3件、1960年～1997年、1998年～2007年、2008年～2016年がそれぞれ1件発行されている。

表3 「保育内容 環境」に関する研究における情報文献の出典と発表年のクロス集計

	学会	紀要	その他	総計
1960年～1997年	9	6	1	16
1998年～2007年	11	27	1	39
2008年～2016年	16	70	1	87
2017年～2019年	4	98	3	105
総計	40	201	6	247

以上の結果から、「保育内容 環境」における研究の年次変化については、大学紀要において増加の傾向がみられた。そして、「保育内容 環境」に関する研究の総計は、年次変化に伴い徐々に増加傾向を示しているといえる。

3.2 「保育内容 環境」に関する論文タイトルの形態素解析

「保育内容 環境」に関する研究の動向を明らかにするために、論文タイトルにおいてどのような語句が選択される傾向にあるのかについて、計量的分析を試みようと、テキストマイニングによる形態素解析を行った。その結果、「保育内容 環境」に関する研究の論文タイトルからの抽出語総数は、計 2,658 語であった。

抽出語の中でも、まず名詞句についてみる。表4は、文献のタイトルに使用されている名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「内容」197であり、続いて「環境」191、「幼児」34、「子ども」「領域」27、「学生」26、「幼稚園」24となっている。

表4 文献のタイトルに使用されている出現回数5以上の名詞句
(頻度順)

名詞	頻度	名詞	頻度	名詞	頻度
内容	197	中心	13	方法	7
環境	191	遊び	13	あり方	6
幼児	34	要領	13	科学	6
子ども	27	教材	12	地域	6
領域	27	課題	11	乳幼児	6
学生	26	効果	10	関心	5
幼稚園	24	試み	10	数量	5
視点	17	意義	9	素材	5
小学校	16	関わり	9	大学	5
課程	15	事例	7	知見	5
人間	15	実態	7	文字	5
言葉	13	取り組み	7	理論	5

次に、抽出語の中でも、サ変名詞句についてみる。表5は、文献のタイトルに使用されているサ変名詞句のうち、出現回数5以上の抽出語に関して出現回数を頻度順に示したものである。最も出現回数が多い抽出語は、「保育」で301件、続いて、「教育」78件、「授業」62件、「実践」52件、「研究」44件、「考察」42件、「指導」38件、「表現」34件、「養成」28件、「関係」「生活」「体験」19件、「活動」「展開」14件となっている。

表5 文献のタイトルに使用されている
出現回数5以上のサ変名詞句
(頻度順)

サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度	サ変名詞	頻度
保育	301	活動	14	活用	7
教育	78	展開	14	観察	7
授業	62	演習	12	造形	7
実践	52	検討	12	着目	7
研究	44	学習	10	連携	7
考察	42	発達	10	意識	6
指導	38	理解	10	総合	6
表現	34	構成	9	依拠	5
養成	28	分析	9	影響	5
関係	19	関連	8	記録	5
生活	19	栽培	8	変遷	5
体験	19	調査	8		

3.3 「保育内容 環境」に関する研究の構造

抽出語間の関連性を探求するために、表4・表5に示した出現回数5以上の抽出語の中でも、出現頻度上位60語までを利用した抽出語間の共起ネットワークを用いて、抽出語間の関連を分析した。その結果については、図1に示し、各抽出語同士の結びつきを俯瞰的にみている。

論文に選択される語句の傾向として、表4・表5の出現回数5以上の名詞句と同様に図1の抽出語間の関連である共起ネットワークにおいても、最も出現回数が多い「保育」や「内容」「環境」を中心として、次のようにとらえられる。「保育内容 環境」に関する研究の構造としては、まず最も出現回数が多いサ変名詞句「保育」を中心に、キーワードとなるサ変名詞句「授業」が中核をなしている。それらに関連して、「保育」「内容」「環境」「教育」「考察」「研究」「指導」「実践」のまとまりがみられる。その出現回数の多いまとまりから、保育者養成課程での保育内容に関する教育が、学生の実情に即して行われていることが推察できる。また、「授業」から「展開」「表現」「活動」「事例」のまとまりがみられる。「展開」からの「造形」「試み」「総合」のまとまりが、保育内容の学習をする際に、「環境」のみならず、「表現」そして、「造形」につながる。他方で、「領域」につながる「考察」「幼稚園」「要領」のつながりがあり、「言葉」「変遷」のつながりを持つまとまりとなっている。この大きなまとまりに続き、「素材」「構成」「遊び」「分析」「身近」「学生」のまとまりは、「保育内容 環境」においては、「保育内容」の学習の際の「環境」のキーワードと読み取ることができる。次に、「生活」「影響」「発達」「子ども」「小学校」のまとまりからは、「保育内容 環境」においては、幼児教育から初等教育につながる「環境」設定のまとまりと読み取ることができる。「栽培」「学習」「体験」「効果」のまとまりも、「生活」「影響」「発達」「子ども」「小学校」のまとまりと同じように、初等教育

につながる名詞句のまとまりであるといえよう。「養成」「課程」「演習」のまとまりは、「保育内容 環境」が保育者養成課程において必須の授業といえよう。「関心」「数量」「文字」のまとまりは、「保育内容 環境」において、数字や「算数」につながる。また「国語」にもつながる、つまり、その教科学習につながるまとまりといえよう。「関係」「人間」は、「保育内容」にも位置付けられており、「保育内容 環境」においては、「人間」も「環境」であるゆえに出現したまとまりといえよう。「知見」「依拠」のまとまりは、次のように考えられる。「知見」は、「実際に見て知ること。」「依拠」は、「あるものに基づくこと。よりどころとすること。」と意味している。このまとまりは、児童教育について、中でも保育内容の環境についての知見と依拠が、結びつくと推察できる。次に「実態」「調査」のまとまりは、保育内容の環境の「実態」を「調査」することが考えられる。そして「課題」「意義」のまとまりは、保育内容の環境における「課題」とその「意義」を研究していると考えられる。

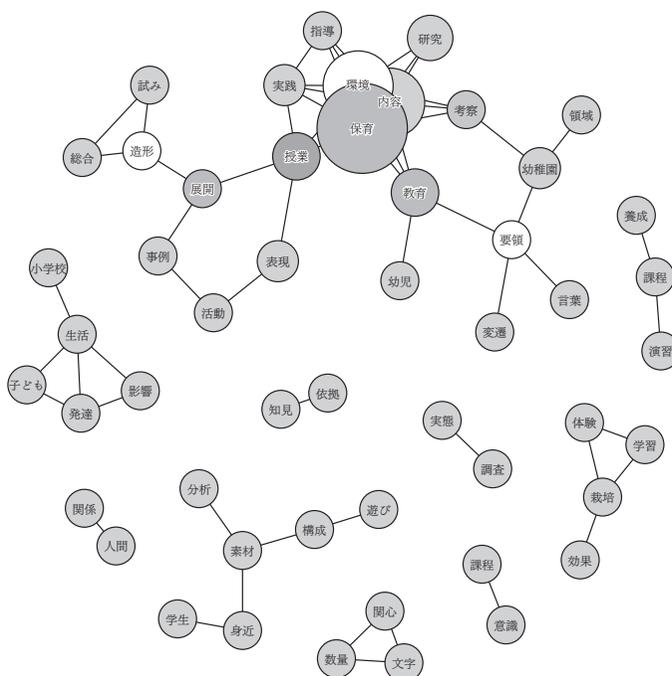


図1 「保育内容 環境」に関する論文の抽出語間の共起ネットワーク

3.4 論文種別による研究動向の差異の検討

論文種別との共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図2に示す。図2より、大学紀要と学会出版物においては、「保育」「環境」「内容」「教育」「指導」「研究」が中核をなしている。「学会出版物」からは名詞句「学生」「幼児」「子ども」「教材」「視点」、形容動詞句「自然」「身近」がつながっている。そして「大学紀要」からは、サ変名詞句「考察」「授業」「実践」

「表現」がつながっている。「その他」の出版物からは、名詞句「遊び」「事例」が、サ変名詞句の「構成」「直目」「観察」「展開」「関連」のつながりがみられる。「大学紀要」「学会出版物」の中核をなしている名詞句「環境」「内容」サ変名詞句「保育」「教育」「指導」「研究」から推察されるのは、養成課程における「保育内容 環境」の「教育」であり、「指導」であること、またそれに伴う「研究」であるといえよう。また、大学紀要からつながるサ変名詞句からは、保育内容の表現と環境が切り離せないものであると推察される。その授業で、考察し、実践に結びつけるための研鑽がなされていることが伺える。学会出版物の名詞句からは、保育・幼児教育現場に直結した保育内容の環境について結びつくと推察される。また形容動詞句からは、保育内容 環境が「自然」の中に存在し、「身近」に関わるものであると捉えられていると考えられる。

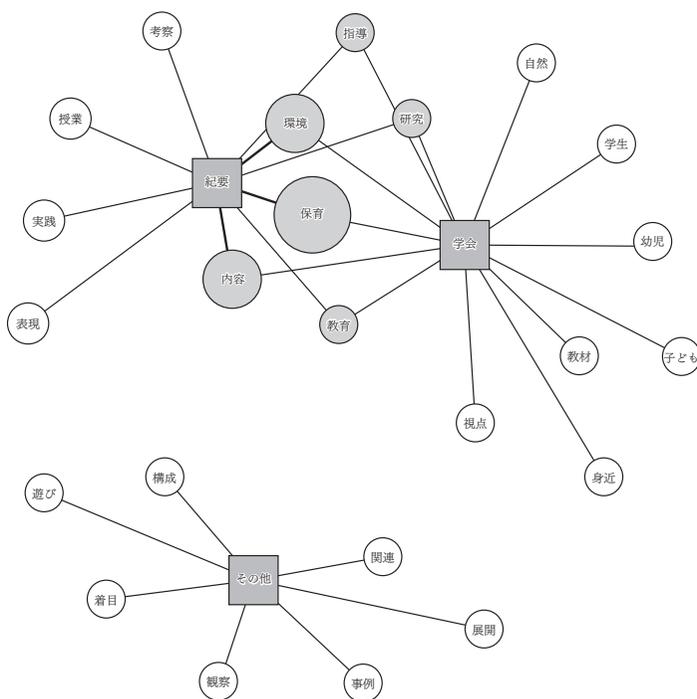


図2 「保育内容 環境」に関する論文種別による抽出語との共起ネットワーク

3.5 年代別に見た研究動向の推移

「保育内容 環境」に関する年代と共起関係を設定して得られた共起ネットワークを、図3に示す。図3において、中心にある抽出語「保育」「環境」「内容」は、表2・表3内に提示した1998年～2007年、2008年～2016年、2017年～2019年の年代に共有されている。したがって、「保育内容 環境」に関する論文タイトルを年代による抽出語との共起ネットワークから、「保育」「環境」「内容」の抽出語は、各年代に共通にみられ、脈々と継続されていることが読み取

れる。また、時代とともに、論文タイトルの傾向は変化している。1960年～1997年時代の「意識」「視点」「研究」の抽出語からは、保育内容における研究者の意識が教育・保育現場に基づくというより、研究現場においてのものと同様に推察できる。またその研究について述べる際には、幼稚園教育要領・保育所保育指針の改訂の影響も大きく影響していると考えられる。その後の2008年～2016年には、「指導」「表現」「実践」「養成」の抽出語がみられた。これは、保育・教育者養成課程における「保育内容 環境」に目を向け、重要視してきていることが伺える。2017年～2019年には、「研究」「関係」「自然」「授業」「考察」「教育」の抽出語がみられた。この時代特有の抽出語「関係」「自然」から考えられるのは、「保育内容 環境」が、関係すると思われる分野について、述べられてきていること、自然に注目していることを意識していることが推察される。抽出語の「視点」は、1960年～1997年と1998年～2007年に共通しており、研究内容の「保育内容 環境」に「視点」を向けていることが伺える。その一因として、昭和31年文部省から刊行された幼稚園教育要領の教育内容が6つの「領域」「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」であったが、平成元年幼稚園教育要領では、6領域を「健康」「人間 関係」「環境」「言葉」「表現」の「5領域」に改められた。この時点で領域「自然」から「環境」になっていることを踏まえ研究対象として、取り上げられていると考えられる。

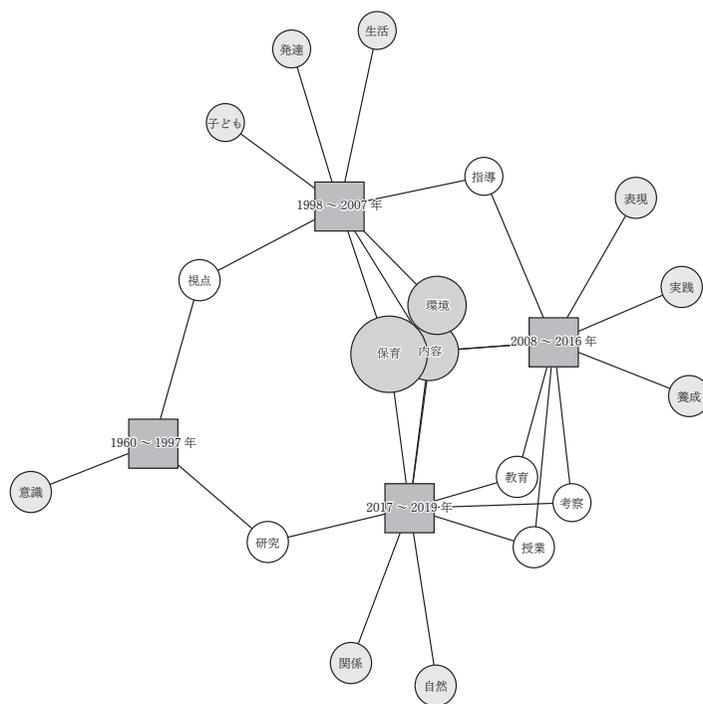


図3 「保育内容 環境」に関する年代別による抽出語との共起ネットワーク

3.6 「保育内容 環境」の研究にみられる抽出語に関する特徴的な研究動向の例

「保育内容 環境」に関する論文のCiNii掲載状況、「保育内容 環境」に関する研究の構造、論文種別による研究動向の差異、年代別にみた研究動向の推移を検討した。検索では、文献において「保育内容 環境」がキーワードで登録されており、タイトルそのものに含んでいるとは限らない。しかし、その中でタイトルを検索するという仕組みの限界はあるものの、全体的な研究傾向を明らかにすることができた。ここで、近年の文献数の増加を踏まえ、さらに年代間で共通にみられる語句に注目し、特徴的と思われる文献をあげて、「保育内容 環境」に関する研究の動向をみってみる。具体的には、本報で取り上げた「保育内容 環境」に関するCiNii掲載論文のタイトルからみた研究動向に関して、先行研究と照らし合わせて俯瞰的にみってみる。

佐藤（2017）は、その研究「保育者は保育内容をどう理解していくのか 領域「環境」を視点とした保育者の語りの分析より」において、保育者の保育内容の理解について述べている。保育内容「環境」について、「1. 園の方針、園文化の影響による差異、2. 同じ園での勤務による自己の保育方法を相対化することの困難さとその差異、3. 保育内容の枠組みの有無による保育内容をつかむ時期の差異について、」追及している。その研究対象者は、数が少ないが、保育内容「環境」を整えることが、保育者、教育者には有効であることが読み取れる。

また、佐藤（2019a）は、「環境」における栽培活動について、幼児の植物の生物的理解について述べている。幼児の保育内容の中の生物学的認識を追求することは、幼児の理解に結びつけるというものである。その内容は、幼児一人一人に聞き取り調査を試み、幼児の語りを引き出し、聞き取る、という一連の作業を進め、まとめている。その結果、幼児の認識は生活の中で栽培経験のある植物と、栽培経験がない植物とでは、違うものと受け止めるほどの、差異を認めるものであった。続いて、佐藤（2019b）は、幼児の季節の捉え方についても、報告している。「春夏秋冬をはっきりと認識できている幼児ばかりではないが、その生活経験、保育教育経験から、季節の認識を物語・歌などの、言葉や実感として、受け止めている」と述べている。そして、幼児の季節の捉え方は、「1. 色、2. 衣類、3. 季節の固定のイメージ、4. 自己の経験から生じた季節の判断がある」となっている。保育・教育の中では、その内容「環境」で、触れているように季節感を持つよう設定されている。保育・教育者、研究者の聞き取りによる幼児の答えを導き出すために、絵本「ばばばあちゃんのマフラー」の絵を写真に撮り、提供している。絵本についても、幼児の環境の一部になっており、幼児の親しみ深いことが、研究の一助になると考えられる。研究の中では、1. 色相と明度、2. 季節に適した衣類、3. 季節の固定されたイメージ、4. 自己の経験から生じた季節の判断において、幼児の季節の捉えを明らかにしている。幼児たちは、普段から親しみの深い「環境」である人間、保育・教育者からの質問で、リラックスして答えている。つまり、幼児の季節の認知は、生活の中、すなわち「環境」から少しずつ出来上がってきていると結論付けることができる。

一方、田中ら(2019)は、保育内容「環境」における安全教育のあり方について述べている。「保育所保育指針」「幼稚園教育要領」の安全教育に対する記述に触れ、幼児の遊び体験と危険察知・回避能力にも触れ、今後の課題については、さらに事例を挙げていくことを掲げている。保育・教育を実施していく中で安全教育は必須項目であり、継続的に掲げていくことは、学習者にとっても、指導者にとってもまた現場において保育・教育者にとっても、欠かすことのできない事案であると考えられる。

伊藤ら(2019)は、「保育内容『環境』における運動あそびの実践に関する研究」を報告している。具体的には、フィンランドの保育園で実践されている室内遊びの工夫を日本の日常生活に取り入れることが可能な園で実践研究を行ったものである。実践園では、保育・教育者と学生がそれぞれ体験して、アンケートに回答している。その結果には、KH Coderを利用して、テキストマイニングが実施されている。そして、保育・教育者にとって有意義な実践であると確認できている。また学生にとっては、9割ほどの学生が当実践を有意義に感じており、体験した学生とそうでない学生の差異も見受けられた。この研究における運動遊びの体験は、生活環境、気候条件により、外遊びができないフィンランドの室内での運動遊びを研究に取り入れ述べている。つまり、天候による変更がない運動遊びを提供できることは、安定した運動遊びを実施することができよう。フィンランドの室内における運動遊びを取り入れることは、日本における地域ごとの天候の移り変わり、気温、室温に左右されることのない運動遊びを実施することになるといえよう。

山路(2018)は、保育内容の環境と地域とのかかわりについて述べている。栃木県における地域の環境素材、また北海道上川郡剣淵町の絵本文化と地域の取り組み、「君の椅子プロジェクト」について、述べている。この研究における「環境」とは、「地域」となり、保育所、幼稚園などの小さな社会ではなく、もっと大きな「環境」であるといえよう。「子どもは地域で育てる」とはよく耳にするが、まさにそのことを裏付けているともいえる。言い換えれば、町全体で子どもを育てるということである。

以上の研究についてまとめると、各研究において共通点を見出すことが可能である。それは、保育・教育現場における保育内容の領域「環境」は、物的環境・人的環境については大きく捉えた環境の社会、集団という「環境」をも見据えて研究がなされていることである。そして、日本のみならず海外における「環境」を日本各地の気候・状況に合わせて応用しており、独自の活路を見出していると思われる。

先行研究を概観する中で、共通して、認識していくべき事項は、「保育内容」「環境」における保育・教育の環境整備を試みている際に、「人的環境」である保育・教育者が細心の配慮を心がけることが必要であるといえよう。

4. 総括

本報では、国立情報学研究所の学術情報ナビゲーター (CiNii) から、「保育内容 環境」をキーワードとしてフリーワードを入力し、それらに関する文献を検索し、論文のタイトルに対し、テキストマイニングの手法を用いた計量的なアプローチにより研究動向を分析し、考察を試みた。

その検出結果より、出現頻度の高い名詞句は、「内容」「環境」「幼児」「子ども」「領域」「学生」「幼稚園」であった。また、同じくサ変名詞句は、「保育」「教育」「授業」「実践」「研究」「考察」「指導」「表現」「養成」であった。これらのことから保育内容の環境には、「内容」「環境」は、もちろん、「幼児」「子ども」「領域」「学生」「幼稚園」と出現しており、保育・教育者の関連語句であると考えられる。その中でも、養成課程の関連語句といえる「領域」「学生」は、キーワードの「保育内容 環境」が、保育・教育者養成課程において重要語句であることを表しているともいえよう。例えば、保育内容、環境であり、幼児や子どもを教育・保育する領域であり、学生を養成し、幼稚園での就業に導く、とつながる語句である。同じく、サ変名詞句の「保育」「教育」「授業」「実践」「研究」「考察」「指導」「表現」「養成」は、保育・教育者養成課程において重要出現語句である。養成課程では、保育の授業で実践的教育を行い、その中で、研究・考察をする。学生たちは、保育内容の中の5領域の一つである環境について、指導を受けているということが反映されている。

また、抽出論文タイトル247のうち、学会出版物が、40、紀要論文が、201、その他が、6を占めているが、紀要論文は短期大学・大学・大学院教育に用いられていることからその割合が高いことも理解に易い。そのタイトル出現年代が、2008年～2016年に、それ以前の倍以上になっており、その後、3年間にも満たない間に1.2倍になるなど、研究論文数の伸びには目を見張るものがある。その理由としては、大学教員の業績重視の傾向があげられる。そして、発表の方法としては、紀要論文は重要な位置を占める。紀要論文に関しては、その発行元の所属、関係者でなければその資格を有しないことが、実情である。学会出版物での発表についても、その所属、関係者である。つまり、論文発表の方法は、限定的であるといえよう。

今後も、保育内容「環境」の研究に、保育内容全般にも視野を広げた研究を継続し、保育・教育者の育成に尽力したいと考える。

参考文献

畑野裕子 (2019) 「保育内容」の研究動向に関する一考察：CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて (藤池安代教授・森田安德准教授・矢野日出子教授ご退任記念号) 神戸親和女子大学児童教育学研究38,231-245.

畑野裕子, 大竹留美, 阪江豪 (2019) 「保育実習指導」の研究動向に関する一考察：CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて 教職課程・実習支援センター研究年報 (2), 107-118,

2019-02-28.

畑野裕子 (2018) 子どもの「運動遊び」に関する研究動向と展望に関する一考察：CiNii掲載論文のタイトルに対するテキストマイニングを用いて 教職課程・実習支援センター研究年報1,151-162,2018-02-28.

樋口耕一 (2001) KH Coder (<http://khc.sourceforge.net/>) 最終アクセス2017年10月19日.

樋口耕一 (2019) KH Coder3 (<http://khc.sourceforge.net/>) 最終アクセス2019年11月19日.

樋口耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析：内容分析の継承と発展を目指して、ナカニシヤ出版.

樋口耕一 (2015) KH Coder 2.x Reference Manual http://khcoder.net/en/manual_en_v2.pdf.

伊藤哲章, 星野朋子, 柴田卓 (2019) 保育内容「環境」における運動あそびの実践に関する研究 郡山女子大学紀要 55,287-298.

厚生労働省 (2008) 保育所保育指針〈平成20年告示〉フレーベル館.

厚生労働省 (2017) 保育所保育指針〈平成30年告示〉フレーベル館.

国立情報学研究所 (NII) CiNii <https://ci.nii.ac.jp/>最終アクセス2019年11月29日.

文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説〈平成30年3月〉フレーベル館.

文部科学省 (2017) 幼稚園教育要領改訂の経緯及び概要.

内閣府, 文部科学省, 厚生労働省 (2018) 平成29年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本 チャイルド本社.

内閣府 (2018) 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 フレーベル館.

田中卓也・岡野聡子 (2019) 「保育内容（環境）」における安全教育のあり方 スポーツと人間：静岡産業大学論集3,163-166.

佐藤智恵 (2019a) 領域「環境」における栽培活動と幼児の植物に関する生物学的理解：幼児の語りの質的分析より 教職課程・実習支援センター研究年報2,61-69.

佐藤智恵 (2019b) 領域「環境」における幼児の季節の捉えに関する研究：幼児の語りの分析より（藤池安代教授・森田安徳准教授・矢野日出子教授ご退任記念号）神戸親和女子大学児童教育学研究38,117-131.

佐藤智恵 (2017) 保育者は保育内容をどう理解していくのか：領域「環境」を視点とした保育者の語りの分析より 神戸親和女子大学児童教育学研究 37,71-81.

山路千華 (2018) 保育内容「環境」における地域との関わりについての一考察：地域の環境素材を活かした取り組み 白鷗大学教育学部論集12,29-51.